

八雲立つ

ギンケン

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

これは本来の歴史から離れた日本の歴史。復活した現人神。迫りくる脅威。出雲に神国『アシハラ』を作り、古王『八雲』は何をするのか。

# 目次

序章	1
第一話	7
第二話	18
第三話	28
第四話	34
第五話	52



# 序章

「……昔、昔。時の帝は朝廷を呪っていた大怨霊『崇徳院』様を討伐なされた。」

儂はただのしがない話し人。名前は……まあ、こんな老いぼれの名前なんて別によいじゃろ。

「ある時『崇徳院』様という方が讃岐の国で暴れ出して人々を不幸にしておった。『崇徳院』様は自身が大天狗で在られ、さらにその地方の祟り神の力も使っておって、それは大層恐ろしかったそうじゃ。それに対してその時の幕府は何万もの軍を送って戦ったのだ。」

儂は旅をしながら子ども達に歴史を教えている。今宵もある村で子ども達に話をしている。

「しかし『崇徳院』様は多数の天狗を率いておられたのじゃ。この天狗は人の何倍も長く生きておって様々な妖術を使えての。」

儂の話を子ども達は熱心に聞いておった。どうやら楽しんでもらえとるようじゃの。

「天狗の妖術はすごいんじゃぞ。一つ扇を揚げば嵐が起き、二回揚げば竜巻が起きると

いう、それはそれは恐ろしい物だったそうじゃ。天狗の妖術に武士は苦しめられ、人々も多勢死んだそうじゃ。」

今儂が話しているのは『日本ひのもと武帝』と言われる話じゃ。

「その時の將軍はどうしようもなくなつて、帝に助けを求めた。それを聞かれた帝は手に神器『草薙劍』を持ち、自ら戦いに向かわれた。更に各地より何人も現人神あらひとがみ様が集まり天狗の妖術に対抗したのじゃ。」

それは大層壮大だったらしく、『香取』、『鹿島』、『諏訪』の三大軍神様の力も揃つたというぞ。そして帝はそれを上手く纏められ、自信も勇ましく戦われて見事『崇徳院』様を倒された。この戦いを『讃岐の戦い』というのじゃ。」

この『讃岐の戦い』は当時の朝廷権威を復活させることになる。また現人神の参戦から別名『神の戦い』とも呼ばれている。そしてこの戦いにより日本の運命は大きく変わっていった。

「その後『崇徳院』様は都に祭られて朝廷の長年の呪いが解けたのじゃ。又、帝の手腕の見事さに人々は世の中を帝に治めてもらいたくての。幕府も朝廷の力を認めざるを得ず、戦より3年後、大政奉還が実現したのじゃ。」

これにより数百年続いた武士の時代は終わりを告げ、神様による時代が戻つたのじゃ。」

「何か変わったの?」

「ここまで静かに聞いていた子供の一人が質問をしてきた。」

「そうじゃの。それまでは殿様、武士が治めておつたじやろ。しかし帝はそれをやめられて、国造こくそう様、つまりその国でもっとも偉い神社に治めさせられたのじゃ。これにより武士は国造様の護衛など軍事の中のかなり限定されたものになったという。とはいっても実際は政まつりごとを結構まかせているがな。」

「じゃあ、何も変わらないじゃん。」

「いやいやお主ら、大事なことを忘れておるぞ。」

「?」

「現人神様じゃ。『讃岐の戦い』頃より人に神威しんい、簡単に言えば、神様の力が授けられての。帝を始め、各地の現人神様が復活したのじゃ。色々な神威の方がおられた。穢れから守られたり、農作物を育てるのを助けたりとな。ちなみに軍神の方々はそれぞれ『剣』、『雷』、『風』の神威で戦いでは大いに活躍したそうじゃ。そうして現人神様達はその神威をもつて人々を救われたのじゃ。」

「へ〜。」

「ただし現人神様の神威には人々の信仰がかかせぬでの、そのために国造様に国を治めさせられ、神社に人々を集められたのじゃ。そしてその考えは見事に成功し、現人神様

のお力により世の中は平和になったのじゃ。」

「けどわたし、現人神様見たことないよ。」

「わたしも」

「おれも」

「それはの、後の『大戦』により現人神様の神威が弱っていったのじゃ。それにより神威を持った現人神様は、今は殆どおられぬ。それにな、神威は神様より授けられるもの。じゃからきつと平和になって人々が幸せになったから神様が必要ないと考えられたのじゃろ。その証拠にお主ら幸せじゃろ?」

そう聞くと子ども達は大きく「うん」と言ってくれて儂は嬉しくなった。まあ、いなくなつたとは言つても数が減つただけでおられる事はおられるのじゃがな。

「その現人神様が讃岐で戦われたんだよね?」

そう思っていると一人が聞いてきた。

「そうじゃよ。」

「出雲の現人神様も?」

その質問に儂は少し躊躇してしまった。

「…いや、出雲の現人神様は向かわれなかつた。」

「え〜!なんで〜!?!」



子ども達の落胆した声が聞こえてくる。

「その頃、出雲に現人神様はおられなかったのじゃ。」

いや、

「正確には現れなかったのじゃ。出雲の現人神様方が現れたのは戦いより数十年してからなのじゃ。」

「なんで？」

「まだ、時ではなかったのじゃ。」

「？」

子ども達は不思議そうにしている。

まあ、そうじゃわな。あの頃もほとんどの者が、あの『讃岐の戦い』がまだ始まりだとは思っていなかったじやろう。

「どういう意味？」

うーむ、そうじゃのう。

「全ては『大戦おおいくさ』のためじゃったのじゃ。」

「？」

子ども達はさらに不思議そうにしている。

「ふむ、そうじゃの……では話してやろうか。」

神国『アシハラ』について。」

子ども達は楽しそうに頷いてきた。

さて、これを思い出すのは何年振りか。

『讃岐の戦い』から約五十年後、出雲にある少年が登場した。その少年はかの大英雄より力を授けられ、日本の運命を変えていく事になる。」

舞台はあの時代へと……

## 第一話

いずこ——

気が付いたらどこかの建物の中で泣いていた。なぜ泣いていたのだろうか。ただ何かに怯えていて、その何かがとても怖かったのは覚えてる。

そうか、怖くて泣いていたのか。何が怖かったのだろう。もしかしたらそれも分からず泣いていたのかもしれない。

さびしい、さびしいと言いながら。

……ああそうだ。やっと思い出した。「寂しい」のが怖かったんだ。一人になるのが、離れ離れになるのが怖くて泣いていたんだ。その時のおれもその事に気付いたんだ。それで寂しくなるのが嫌で、周りを見渡したら

「すまない、怖がらせたか？」

誰かが声を掛けてきた。

その声はとても優しく、とても安心できて、なぜかとても……嬉しかった。そして子どもの勘なのか、おれは気付いた。

あ、神様だ……と

出雲国——

「あく、疲れた。」

さつきまで知り合いの武家の道場に行つて鍛練をやつていたせいで体中がミシミシいっている気がする。

「ちよつと、信弘！なんで先に帰るのよ。」

後ろから声が聞こえてきたので振返つてみると、黒い長髪をなびかせながら走つてくる巫女姿の少女がいた。ちなみに信弘とはおれの名前である。

「待つてくれたつていいじゃない。」

幼馴染の静香だった。気付いたらもう十年以上の付き合いになつていた兄妹のような関係だ。

「だつてお前話してたけん、邪魔したら悪いなと思つてな。」

「それでも普通待つているものでしょ。家同じなんだから一緒に帰つてもいいじゃない。」

「家が一緒だけんつて一緒に帰らなくても良いと思うがな。」

子供のころ杵築大社にいたおれを引き取つてもらつた時から、おれは静香の家に世話になつてゐる。

ちなみに静香の父親は杵築大社の神職で、出雲国造様に仕えている。静香も杵築大社

の巫女で、おれも一応手伝い程度だが大社で働いている。

「何ですよ？昔からいつも一緒に帰ったじゃない。」

言われてみれば確かにいつも二人で出かけてた気がする。おかげで他の子達と遊びに出かけた覚えがない。が

「昔は昔、今は今だ。」

「なによ。いじわる」

何か不満そうだが気にしない。てか、年頃の女子が頬脹らますな。

「しかし何でお前着いてきたんだ？鍛錬しないのに。」

「もく、父様にあんたを見とくようにって言われたって何回言えがいいのよ。」

「あく、何か言つてた様な気が。けど暇じゃなかったか？ずっと見てるだけだったろ。」

「別にそうでも無いわよ。玉もいたし。」

玉とは道場の師範の娘で、まだ十歳だが将来は美人になるだろうと巷で噂になつてい  
る子だ。

「それに信弘がぼこぼこにされるのを見るのも面白いしね。」

「悪かつたな、弱くて。」

ふてくされたようにすると静香は笑いながらごめん、ごめんと言ってきた。

そんな風にいつもの様に他愛ないことを話しながら帰っていた。いつも通りに過ぎ

ていくと、おれがそう思った時だった。

「…ねえ、信弘最近なんか元気ないんじゃない？」

と静香が心配そうな表情をしながらいきなり聞いてきた。

「なんだよ、藪から棒に？」

「……何かそう見えたから。」

「そうか？」

「うん。今日も何となく上の空だったし。何かあったの？相談にのるわよ。」

……自分ではいつも通りに振る舞っているつもりだったんだがな。

「なんでもない。ただ今朝見た夢が悪かったただけだ。」

ま、それでも言う訳にはいかないが。

「……どんな夢見たのよ？」

「山にいたら大量の蜘蛛に襲われた夢。」

蜘蛛という単語に静香の顔がさっと青くなった。おれはそれに気付かないふりをし続ける。

「あれは怖かった。ただの蜘蛛じゃないんだぞ。おれより一回り位大きいせいで、気持ち悪さが何倍にもなってるな。そんなのが何十体、何百体も八本の足をカサカサいわせながらこつちに向かって来るんだ。」

静香はヒツと後ずさった。目には心なしか涙が少し見えるような気がする。

「しかもな、逃げようとしたら足に蜘蛛の糸が絡まって逃げられなくなって、そうして近づいた蜘蛛の目に睨まれてそのまま…」

「もうイヤ〜!!」

ついに静香は我慢出来なくなつたようで、悲鳴をあげながら走つて行つた。

「怖がらせ過ぎたか…」

静香は蜘蛛が昔から大の苦手だつた。指先ほどの小さな蜘蛛でも見ただけで涙目になつて逃げていく。その後慰めるのにどれだけ苦労したことか。そう考えるとさっきのはただの作り話とはいえ、良くあそこまで耐えたものだ。

「こりや、後が大変だ…」

ハハと乾いた笑いが出る。しかしいつも一緒とはいえ、静香に気づかれ、あまつさえ心配させちまうとは。こりやほんとに疲れてるかもな。

「時が来たか…」

ぼつりと出たこの言葉が教える。あの時の約束を果たす時が来たと。

「まあその前に、目先の問題か」

言えないとはいえ、心配してくれたのに悪い事しちまつた。下手したらしばらく話をきいてくれないかもしれん。何とか謝らねーと。

——森山家の屋敷

「ただいま」

「おかえりなさいませう。信弘様、また静香様泣かせましたね。」

「げ、泣いてた？」

「寸前ぐらいでした。」

この人は千代さん。たしか三つぐらい年上で結構気さくに話しかけてくれるここにお手伝いに来ている人だ。まあ気さく過ぎて先輩の松さんによく叱られているが。

「全く。ほどほどにしないと嫌われてしまいますよ。気を付けてくださいね。」

「気をつけるのはあなたでしょ。」

げっ…と千代さんが後ろを見ると、そこにはどう見ても怒っている年配の女性、松さんがいた。

「おかえりなさいませ、信弘様。」

「ただいま。」

「大旦那様がお待ちでしたのでお部屋にお向かいになつてください。」

「幸隆様が？」

「はい。急ぎ来るようにと。」

何の用だろうか…。もしかしたら…。いや、考えても仕方ないか。



「分かった。すぐ向かうよ。」

「だめですよ信弘様、先に静香さまのところに…。」

「あなたの口の出すことではありません。あなたには私から話があります。」

「あ、松さんそんな。信弘様助けて。」

松さんに引つ張られて行く千代さん。まあ、いつものだが。

「今度は何やったんだろ…。」

この前は味噌と塩を間違えたんだっけ。どうやって間違えたかは今でも謎だ。

「つと、早く向かわないと。」

静香には悪いがおれは先に幸隆様の部屋に向かった。…ほんと、なんて謝ろう。結構

あいつ、根に持つからな。」

幸隆様の部屋の前に来て、一呼吸した。この部屋の前に来るといつも緊張する。子供の頃からここに来るとしたら叱られるか、勉強するかのどちらかだったからだろうか。

「幸隆様、信弘です。」

「入れ。」

返答の声は年相応の落ち着きを持っていてと同時に威厳にも満ちていた。

「失礼します。」

襖を開けると、部屋には一人の老人がおられた。森山家先代当主、森山幸隆様だ。白髪、しわの目立つ顔ですでに七十を超えておられるはずなのにそれを感じさせない威厳をこちらに思わせる見事な風格だ。子供の頃より幸隆様は色々してくださった。学を教えて頂いたり、道場、知り合いの武家で剣術を学ばして頂いたり。幸隆様曰くこれは後のおれを助けるからやっておけだそうだ。

「今日ここにお主を呼んだのは聞きたいことがあったからじゃ。」

「……何でしようか。」

「お主、最近変わったことではないか。」

「変わったこととは？」

「たとえば……」

幸隆様は一呼吸あけられ

「夢じゃ。」

………気付かれています。誰にも、静香にできえ話していないのに。

……いや、最初から分かっていたのかもしれない。おれは大社の本殿にいた所を見つかっている。本殿は帝も入ることを許されず、入れば厳罰を受けるといふ。しかしおれは罰を受けず、それ所か森山家に住まわしてもらっている。あの頃は気にしなかったが、今考えれば不可解なことだらけだ。しかし…

「いえ、特には…。」

おれは隠すことにした。心苦しいが、それでも知られたくなかった。知られる事で落胆されるのがおそろしかった。

「そうか…。」

幸隆様は少し考えられて…

「信弘。」

「はい。」

「今から大社に向かうのだ。」

「今からですか?」

時刻はもう夕時。距離は近いとはいえ、帰る頃には暗くなってしまう。

「うむ。国造様と美保様にお会いしてくるのだ。」

「その必要はありませんよ。」

声は外から聞こえてきた。窓の襖をあけるとそこには一羽の雀がいた。

「美保みほの様…。」

宣託の現人神、美保様。無論この雀が美保様ではない。美保様の神威によるものだ。美保様は数多の生き物に自分の意思を乗せる事ができ、その神威により人々に言葉を伝える事が出来る。普段は美保閨の美保神社におられるが最近はよく大社の方に来られ

ていた。

「失礼ながら立ち聞きしてしまいました。」

「お気になさらず。して、どの様……もしや？」

「はい。先ほど宣託があり、お伝えしに来ました。」

美保様の宣託は、宣託の神『事代主神』《ことしろぬしのかみ》よりの予言。という事は……

「もうすぐです。」

幸隆様の部屋を出た後、おれは部屋で考え事をしていた。

「国造様にも神威が戻った。」

出雲国造様は天津神『天穗日命』《あめのほひのみこと》の子孫。国造様も現人神であられ神威を持たれている。しかし先代の国造様は五十年前の『讃岐の戦い』には向かわれなかった。なぜなら国造様の神威は先代まで発現しなかったからだ。

……しかし今の国造様には神威が現れた。

「必要な時が来たということか。」

それは世の中が荒れるということ。神の力は人には過ぎたるもの。その力を人に持たせなければならぬ程の何かが起きるということか。戦か飢饉か、人か自然か。

そして…

「内か、外か。」

今、この日本には多くの現人神がいる。それは出雲も同様だった。美保様や国造様を始め出雲の神の神威を受けた現人神がいる。それは、朝廷が、否、天津神が出雲の力の復活を許したということになる。天津神がそこまでするとなると、大神が仰られたようにおそらくこの国の建国史上最大の危機が訪れる。それこそ日本が滅亡するほどの。

そして、美保様の宣託…

「古王再来…」

古王。聞いたのはあの時以来になるか。

「まあ、今のおれが考えても仕方ないか。」

夕飯まで寝るか。稽古で疲れたし。

「……しかし、何か大切な忘れているような。」

しかもごく最近のことです…。

「ま、いいか。」

それを思い出す事無く、おれは臉を落とした。

## 第二話

——何処（いずこ）

「悪いな、いきなりこんな所に連れてきて。しかし外には出れなくてな。来てもらうしかなかつたんだ。」

神様はおれの前に座っていた。神様の近くはとても安心できて、まるで昔からずっとそばにいてくれたみたいだった。気付くとさつきまでの寂しさが嘘のように消えていたのを覚えている。

「君を呼んだのは、ある事を頼みたいからだ。これはとても危険で大変な事だ。その様な事をいきなり頼むなど、あまりにも身勝手だとは分かっている。……けど、それでも君にしか頼めないんだ。」

神様の声にはなぜか悲しさがあつた。まるで言う事を拒んでいる、そんな風に思えた。

けれど神様は言った。そしてその言葉を聞いたときに、おれの運命を決定した。

この

「どうかこの国を、守って欲しい。」

神様の頼みを聞いた時から

やはりこの夢だった。最近はずっと同じ夢だ。いや、夢と言うよりは思い出していると言う方が正しいのかもしれない。

「はあく。何してんだろ、俺」

無意識に溜息をついてしまう。寝ていたはずなのにこの疲労感。あの夢、いや大神のあの言葉の事ばかり最近は考えてしまう。

はたしておれは成し遂げる事が出来るのだろうか。

「はあく。」

またため息が出る。

無意識の内に言い訳を考えてしまう。子供だったから何も知らなかった、寂しくて悲しかったから。

そんな事を考えるた自分が嫌になってしまう。だがそんな弱い自分を擁護してしまう気持ちも確かにあった。

もしかしておれは、後悔しているのだろうか…。

「……様」

今になって後悔なんて。そんな事無意味だ。

「…ろ様」

あの返事をした時におれの意思は決まっているはずだ。なら答えは一つしかないはずなのに。

「信弘様!!」

「うお!?!」

び、ビックリした。

「やつと起きましたね、信弘様。」

「千代さんか。びつくりさせないですよ。」

「気付かない信弘様がいけないんです。さつきからずっと呼んでいましたのに。」

「ごめん。考え事してて全然気付かなかった。」

「夕食のお時間ですのでお呼びに來ました。皆さんはもう集まっていますから急いだ方が  
良いですよ。」

「まじ!?!やば、早く行かないと。」

おれが急いで部屋を出ようとすると

「信弘様」

千代さんが

「覚悟しといたほうが良いですよ。」



警告をしてきた。

森山家は現在、当主で静香の父親の孝幸殿、母親の静音さん、嫡男の幸正殿とその奥さんの由実さん、隠居の幸隆様に静香、あとおれ、それにお手伝いの松さん、千代さんの九人で暮らしている。因みに幸隆様は五十年前の『讃岐の戦い』に参加して多大な戦果を上げたらしく、その功績で隠居されるまでは国造様の右腕で活躍していた。現在もその影響は大きく、国造様の相談役になっている。

んで、松さんと千代さん以外の全員が揃っているこの夕飯だが…

「……。」

「あー、静香。」

「……。」

夕飯に来てからずっとこんな感じである。そう、千代さんの警告とはこの事だったのだ。寝てすっかり静香を怒らせていた事を忘れてしまっていた。困り果てたおれは孝幸殿に目で助けを求めたが

「ハハ……。」

…目を背けられてしまった。ならばと幸正殿に助けを求めたが

「……せむべ。」

助けてもらえなさそうだ……。どうしようかと悩んでいたら静音さんと由実さんが  
(がんばって)

と目で言ってきた。孤立無援、この状況をおれは！

「もぐもぐ……。」

無心で食べることにした。

「はあく。まさか、忘れてしまうとは。」

結局一言もしゃべらずに別れてしまった。風呂に入ってからも考えてみたが妙案は思い浮かばなかった。

「このままじゃ、やばいな。」

恐らく明日もあんな感じだろう。あんな空気もう耐えられる自信ないのだが、何の手も浮かばない。完全にお手上げだった。

「何を悩んでいるんですか、信弘様。」

失礼しますと言いながら千代さんが入ってきた。

「千代さん。何か用？」

「はあく。」

なぜか溜息をつかれた。

「何か用、じゃありませんよ信弘様。こんな所で何をしていますか。」

「こんな所つて、ひどいな……。」

一応おれの部屋なのに。

「いいですか信弘様。貴方様がしなければならぬ事は、ここで悩んでいる事ではありません。謝ることです。」

「いや、それは分かっているんだけど……今更謝つても許してくれないだろうし。」

「一回でだめなら二回、それでだめならもつと他の事で謝罪の気持ちを表すなど、やれることは色々あります。けれどまずは謝らないと始まりません。」

「……。」

「ですから信弘様、ここは男として潔く碎けに行ってください。」

「碎けにつて……。けど千代さんの言うとおりで。ここで悩んでも仕方ないか。まだ謝つてないし。うん、おれ行つて来るよ。」

「静香様なら縁側におられますよ。」

「ありがとうございます。けど……」

おれは千代さんの方を振り返り

「また松さんに怒られるよ。」

おれの心配に千代さんは笑顔で

「私が怒られるぐらいでお二人が仲直りするなら安いものですよ。」  
と言ってくれた。

「ありがとう。」

さて、頑張りますか。

「…それに信弘様が謝らないと、静香様も許すことが出来ませんよ。」

縁側に来ると静香が一人で座っていた。おれは意を決して静香の隣に行つて

「静香！」

「えっ、信弘。」

「今日はごめん！おれが悪かった！」

土下座した。もう体面関係無く謝ることにした。まあ、体面なんて最初から無いんだけど……。とにかく謝って、後は野となれ山となれだ。

「…うん、私もごめんね。」

「え？」

あれ、何か謝られた。

「な、何で謝るんだよ。悪いのはおれの方だろ。せつかく、土下座までしたのに」「ハハ、土下座はちよつと驚いたな。いきなりやるんだもん。」

……でもね、お昼の時悪かったなって。」

「昼間の事？なんかあったか？」

「信弘が私を怖がらせた。」

「うっ…、それは本当に悪かったって。」

「やっぱまだ怒ってんのか？」

「冗談、冗談。その事はもう怒ってないよ。」

「それならありがたいけど。」

「どうやら本当に怒ってはいないらしい。じゃあ、一体？」

「……私信弘に元気が無いって聞いたじゃない。」

「……ああ。」

静香の声は囁き声のように小さかった。

「あの後不安になったの。だから謝ろうと思って。」

「不安って、何にだ？」

「聞いちゃいけない事、聞いちゃかなって。」

「え……？」

「あ、信弘は悪くないよ。私が一人で不安になっただけだから。」

でもね

「なんで相談してくれなかったと思つたら、不安と一緒に何か悲しくなっちゃってね。ほら、ずっと一緒だったじゃない。けど、私達成長したからもう、一緒には居られないのかなって。そう思つたら……ははっ……私って自分勝手ね。」

信弘にも話したくないことの一つぐらいあるのにね

静香は笑いながらそう言ってきた。けどその笑った顔は悲しそうだった。

……何やってんだよ、おれ

「ごめんね、信弘。聞かれたくない事聞いて。」

おれが今になってウジウジ悩んじまったせいで静香を心配させちまつたんだろ。なのになんで静香に謝ら知つてんだよ。

謝るのは……おれの方だろうが。

「ごめん、静香。」

「えっ?」

「あの時、何も言えなかったのは静香に心配させたくなかったからのもある。けど情けないけど一番の理由は怖かったんだ。」

「怖かった?」

「うん……。おれ、ある方に凄い事を子供の頃に頼まれてさ……。」

決めた。静香に話そう。

あのお方、大神との出会いを…。

## 第三話

——何処いずこ

「どうかこの国を、守ってほしい。」

「くにをまもる?」

「ああ。これから暫くするとこの国に大いなる災いがやってくる。それを人の力のみでは乗り越えられないと判断した神々は、人々に神威を与える事にした。しかしそれでも足りないんだ。神々もそれは分かっている。しかし我々が直接手を出すと中津国、人の国にどのような影響が及ぶか分からないのでどうしても一手足りないんだ。」

あの頃は難しくて分からなかった。しかし学を学んだ今なら分かる。神々は直接手を出せない。だから天孫降臨を行い人に治めさせ、いつも間接的に助けていたんだ。神武天皇の東征の時は八咫鳥を派遣し靈剣を与え、元寇の時には神風を起こしたように。

「なので神々は決めた。天孫降臨の再現、『古王再来』を。」

「こおうさいらい?」

「そう。天孫、『天の皇すめらぎ』の力だけでは国は災いから守れない。ならば古き王、『大地の王』の力を復活させ、『天地融合』をしようと。そしてその古王の力を授けられ



るのは……君しかない。だから頼む。どうか王となってこの国を守ってくれ。」

神様はおれを見て頼んできた。多分あの時のおれは神様の言ってる事を全部は分つてなかつたと思う。けど……

「うん分かつた。まもるよ。」

迷い無く答えていた。この時の神様の驚いた顔は今でも鮮明に覚えている。

「……すまない。こんな危険で辛い事を頼んでしまつて。」

「ううん、気にしないで。神様困ってるんでしょ。だつたらおれが助けてやるよ。」

あの時の答えの理由はとても優しい神様を困らせたたくない、ただそれだけだつた。だつて勝手に王にさせる事も出来たし隠しておく事も出来たはずだ。それでも教えてくれて、そして心配してくれたこの優しい神様を。

「だから安心しなよ。」

「……ありがとう。」

神様は嬉しそうに笑われた。気付いたら俺もつられて笑つていた。

「君に頼んで良かった。王になるのが楽しみだ。」

「へへ。」

「恐らく、いや必ず辛い時があると思う。その時これが少しでも役に立つと有難い。」

そう言う時神様は何か光るものをくれた。

「何これ？」

「君の力になるものだ。これが顕現した時君は、王になる。」

「へー、そうなんだ。ありがとう、神様！」

「……ああ」

あの光が何なのかは今でも分からない。でもあの時は神様がくれた、その事がとても嬉しかった。

「さて、もうそろそろ時間か。すまないがお別れだな。」

「え、もう……。」

「なんだ、寂しいのか？」

「うん。なんか神様、お父さんみたいだったから。」

「……そうか。」

「……だめだった？お父さんって。」

「いや、……息子が一人増えて嬉しいぐらいだ。」

「ほんと!？」

「ああ。だから安心しろ。私がいつでも見守っている。だから……頑張れ。」

「うん！」

「ではな。」

「……ねえ、神様？」

「何だ？」

「神様は、何て神様なの？」

そう聞くと神様はこつちを振り向いて

「我が名は『大国主』。国を造る神だ。」

そう言つて消えていった。

「その後は知つての通り森山家に住むようになり……つて、どうした？」

ふと静香の方を見ると何かぼかんとしていた。

「おい、どうした？」

「ど、どうしたじゃないわよ!? そ、その話し本当なの!？」

「ん、本当の話だが。」

静香は何故か頭を抱えていた。

「どうした？」

「ちよつと混乱してるだけだから気にしないで。」

静香の整理がつくのを待ってから、おれはまた話し始めた。

「あの時、おれは大神に守るつて言った。けど最近になつて怖くなつてな。」

「怖くなった？」

「ああ、分かるんだよな。もうすぐ来るって。でも怖いんだ。約束を守れるのかって。」  
「……」

「もちろんおれが失敗したらこの国が滅ぶかもしれない、その事も怖い。その危機自体も怖い。……でも一番怖いのは、守れなかったら大神に嫌われてしまう、そしたらまた一人になってしまう事なんだ。」

そう、怖かったのは王になる事じゃない。この国を守る事じゃない。約束を破ってしまつてあの頃のように暗闇の中で一人になるのが怖かった。

「それで最近ずっと考えてるんだ。おれなんか守れるのか。おれで良いのかって。」

「良いんじゃない」

……このお嬢さんは何をあつけカランと

「良いんじゃないって…簡単に言ってくれるな…。」

「だって大神様が信弘を選んで、頼まれて信弘が自分で決めたんでしょ。大神様が、信弘なら任せられると思われたんだからきつと大丈夫よ。」

「そうは言つてもな…。」

「それに私も、信弘なら大丈夫だと思う。ずっと一緒に私が言うんだから間違いない。だから、」

その時の月明かりに照らされた静香は

「守って。」

とても綺麗だった…。

「…ああ」

静香の言葉に今までの悩みが晴れたような気がした。

何悩んでいたんだろうか。出来るか出来ないかなんかじゃない、やるんだ。だっておれは大神と約束したんだ。

(守るって)

そして今夜、その願いは静香の願いにもなった。まだ人のおれだけどここの願い、絶対守りたい。

「ありがとう静香。おれ、がんばるよ。」

おれの決意を静香は

「うん、がんばって。」

笑顔で応援してくれた。

それは春の満月の夜のこと。一人の少年の、人としての最後の夜だった。

## 第四話

起きたら朝だった。それも日が明けたばかりの早朝。

「…久しぶりに良く眠れたな。」

静香に話したおかげだろうか。昨日までの疲れが無くなっていた。話すだけでこんなに気が楽になるなんて思わなかった。

「さてと…。」

おれは起きて服を着替えて、茶の間に向かった。

「あら、おはよう」

茶の間に行ったら由実さんがおられた。

「おはようございます。今日は早いですね。」

「ええ、もうすぐ例祭でしょ。それで例祭で舞う神楽を見て欲しいって静香に頼まれてね。けど起きるのが少し早すぎたみたいね。」

由実さんは幸正殿と婚姻を結ばれて引退される三年前までは大社で巫女をしていた。由実さんの舞いはとても綺麗で、幸正様も例祭の由実さんの神楽を見て一目惚れされた

らしい。引退された今は大社の巫女に舞いを教えている。

「まだ朝日が出たばかりですからね。もう少し寝ていれたと思いますよ。」

「けど前はこれが普通だったのよ。神社の掃除をしたり舞の練習をしたりね。昔は『おくに』のようにと思つて頑張つたものよ。」

『おくに』とは昔いた大社の巫女のことである。その舞は天下一とまで言われ、一度舞えば人々はその美しさにため息をつきながら見入つたと言う。帝も宮中に招待して舞わしたと言われる。今ではその舞は伝説になり出雲の巫女の憧れとなつている。

「由実さんの舞は本当に綺麗でしたからね。もう一回見たいです。」

「ふふつ、残念ながらそれは無理ね。私はもう引退したから舞えないわね。けど安心して。静香はもう私の舞より上手く舞えてるわ。だから次の例祭、楽しみにしてなさい。」

「由実さんのお墨付きとあらば楽しみにしない訳にはいきませぬね。」

「私も楽しみだわ。…で結局静香とは結局仲直りできたの？」

「あ、はい。おかげさまで。」

「それは良かったわ。昨日静香本当に悩んで、私やお義母様に相談してる時も不安そうにしてたわ。」

「静香、相談してたんですか…。」

「ええ。聞いちゃいけないこと、聞いちゃつたんじゃないかって。まあ、どつちかて言う

と、しゃべってくれない事が寂しかったんでしようね。」

「あいつ、そんなに……。本当に悪いことしちゃったな。」

「隠し事の一つや二つ誰にでもあるとは思うけど、でも今回はそれだけじゃ無いみたいね。」

「うっ……。」

「女の子を泣かせるのは関心しないわね。まあ、きつと信弘君にはいじめたい理由があるんでしようね。」

「なんですか、いじめたい理由って？」

「良く言うじゃない。気になる子ほどいじめたくなるって。」

笑いながら由実さんがからかう様に言ってきた。

「気になる……。確かに幼馴染ですから気になるって言ったら気になりますけど。」

「そういう意味じゃないんだけど……。まあ、これからね。」

「何がこれから分からないんですけど。」

そうこうしていたら静香がやってきた。

「おはようございますって、あら、信弘もいるの？」

「おはよう。神楽の練習だつてな。」

「うん、もうそろそろ仕上げに入りたいし。由美さん、今日もよろしくお願いします。」



「ふふ、はい。こちらもよろしく。じゃあ信弘君、これから練習だから。」

「分かりました。静香、がんばれよ。」

「ありがとう。」

さて、散歩にでも出かけるか。

「あ、信弘。」

「どうした？」

「……信弘も頑張つてね。」

「ああ、お互い頑張ろうぜ。」

散歩から帰ると、朝食の朝食の時間になっていた。

「そういえば、信弘。お主今日も安部殿の所に行くのか？」

その途中で孝幸様が声をかけてきた。安部殿とはおれの道場の師範である。安部家は昔より森山家と関係があるらしくその縁でおれも安部殿の道場に通っている。

「はい、その予定です。」

「ここ最近妖あやかしが出るらしいから注意するんだぞ。」

「父様、それはどのような妖なのですか？」

「人の背丈を超える大蜘蛛らしい。」

静香がビクツと体を震わせた。

「そ、そのような妖がまだ退治されてないのですか…。」

「うむ。長浜様が探しておられるが今だにの。」

「長浜様が担当されておられるとは。」

長浜様は『八束水臣津野命』より神威を授けられたお方。神威は『国引き』。その力に動かせないものは無いといわれている。昔はよく遊んでもらい、よく知っているお方だ。

「先日より美保様も探してくださいっておられるから、もうすぐ退治されるとは思いますが、二人とも十分注意してください。」

「分かりました。」

「分かりました…。」

朝食が終わり孝幸様達は大社に向かわれた。おれ達も少し遅れて向かおうとしたら千代さんに声をかけられた。

「仲直りされたみたいですね。」

「なんとかね。けど千代さん、何か眠そうだけど…。」

「昨日、松さんに夜遅くまで怒られてまして。」

「あー、ごめん。」

「昨日言いましたよ。お二人が仲直りするなら安いものですと。だからお気になさらないでください。」

おれが謝ると千代さんは笑って答えてくれた。

「信弘。行くわよー。」

「では、信弘様いつてらしゃいませ。」

「いつてきます。」

静香の所に向かう途中でおれはもう一度小声で

「それでも、ありがとう。」

千代さんにお礼を言った。

大社での仕事（とは言つてもただの手伝いだが）を終えて、おれは静香と道場に向かった。

「朝の練習、由実さんどうだった？」

「上手くなつてゐる。でも例祭も近いし、もつと頑張らないといけないけど。」

「由実さんはもう自分の舞より上手いつて言つてたから本当に上手くなつてゐるんだろうな。」

「由実さんがそんな風に。よろし、この調子で例祭も頑張るわよ。」

「おう、おれも楽しみにしてるぞ。」

「ありがと。ていうか、信弘元氣そうね。」

「おう、久しぶりにぐつすり寝れたな。これも静香に聞いてもらったお陰だな。ありがと。」

「そう。それは良かった。」

「けど昨日は本当に悪かった。まさか静音さんや由実さんに相談するまで追い詰めるとは……。」

「えっ!? 相談したの誰に聞いたの!?!」

「あ、由実さんだけ……。」

「な、何て言ってた?」

「昨日、静香が言ってたことをだが……。」

「あ……。」

おれがそう言うのと静香は顔を赤くした。

「ん、どうした? 顔が赤いぞ。」

「な、何でもない。」

「風邪でも引いたんじゃないか?」



「そうなの?」

「ああ。美保様の宣託もあるし。確信があるかどうかは分からないが。」

そう、昨日の幸隆様の質問、そして美保様の宣託。おそらく気付いている。

「気付いていて、父様達は何も言われないの?」

「それとなく聞いてきたりはするが…それぐらいだな。まあ、これを疑うのは気が引けるんだろうな。」

「まあ…そうよね。疑ったら大神様を疑う事になるものね。」

出雲での『大国主大神』の信仰心は絶大であり、帝の祖神『天照大神』と同等か、それ以上の存在となっている。

『神威』は八百万の神々から授けられるもの。その神威を使う現人神は神々の化身だ。しかし、三貴子やそれより上位の創造神達の神威はあまりにも尊とうとく、天孫の帝以外には現れないといわれている。

そしてこの日本ひのものと基礎を造りし『大国主大神』も三貴子と同等の存在されており、神威は現れないとされていた。しかし大神はおれに授けられた。それは、大神の意思。それを疑うことなど国造様達にできるはずがない。

「けど、話してないのはおれが臆病な所為だからな…。」

「そういえば、そうだったわね。」

静香は笑いながらそう言ってきた。

「笑うことないだろ。そりゃ、おかしいだろうけどよ。」

「違う、違う。信弘が私にだけ話してくれたと思うと嬉しくてね。」

それから静香はずっと笑顔だった。

(何か、こういう気持ちでいるの久しぶりだな。)

「そういえば、信弘。巫かんなぎはどうするのよ?」

と思ったら静香がいきなり聞いてきた。

巫かんなぎとは現人神に仕える巫女である。

現人神も神であるので、人々の信仰が重要であり、信仰が無くなったら現人神はただの人となってしまう。そして人々の信仰を現人神に伝えるのが巫の役目である。他にも神威の補佐などがあり、現人神の様々な補助をしている。

「それこそ分からんな。誰と結ぶのかその時次第としか言いようがないな。」

「そ、そう。なら私が「いらしゃーい。」」

「やあ、玉。一日ぶりだな。」

「こんにちは、信弘お兄ちゃん。」

「……」

「ん、どうした静香?」

「何でも無いわよ…。」

「？」

何故か静香がすねたような顔をした。その理由が分からないで玉と二人で顔を見合した。

「はーあ。玉、こんにちは。」

「こんにちは、静香お姉ちゃん。どうしたの。」

「何でもないから、気にしないで。」

「う、うん。分かった。」

「こんにちは、二人とも。」

玉と話していると安部殿が来られた。

「こんにちは。」

「こんにちは。今日もよろしくお願いします。」

「こちらもよろしくお願いします。ところで静香殿。」

「はい、何でしょう？」

「今日は山の方には近づかない様に注意してほしいんだ。」

「妖ですか？」

「うむ。昨日、近くの村の住人がやられたそうだな。この近くに来ているかもしれないな。」



い。」

「大丈夫なんですか？」

「長浜様が見当を付けられたらしい。恐らく近日中に退治されるだろう。」

「分かりました。」

「まあ、会った時は玉より静香の方が気絶するだろうな。」

「私もそう思うな。」

「玉までひどいわね…。」

「じゃあ否定できるのかよ？」

「……無理。」

「それでは、本日の稽古はこれまで！」

「「ありがとうございます!!」」

「さてと」

いつも通り道場で稽古を終えた後静香を探した。

「あれ？」

しかし、道場のどこにもいない。

「安部殿、静香を知りませんか？」

「いや。私も玉を探しているのだが、静香殿もいないのか。」

「玉もいないという事はまだ帰っていないのでしょうか?」

「かも知れないな。探しに行くか。」

そう言つて探しだそうと、扉の方に向かおうとしたらいきなり玉が飛び込んできた。

「大変なの!」

「どうしたんだ、玉!」

玉は息を切らし、汗をかき続けていた。

「山に…行ったら、大きい…蜘蛛が出て…」

「山にいったのか!」

「ご、ごめんなさい。」

安部殿に怒られ、玉が体を振るわせた。

「それで静香はどうしたんだ?」

「山から出さないためつて残つて…」

「あの、バカ!」

気付いたら飛び出していた。

あの人の蜘蛛嫌いの静香が平常でいられるはずがない。それでなくても妖は危険だ。

おれは無我夢中で走った。

(無事でいてくれよ。)

「どこにいるんだ…。」

山に入って静香を探したが、山は生い茂っていて遠くが見えない。周りを見渡しても手がかりも無く、大蜘蛛と静香の姿も見えない。山は広い、それにもうすぐ夕方だ。暗くなればさらに見つけにくくなる。それに山付近に来た時から感じる、この禍々しさ。ただの大蜘蛛からは絶対にありえない。まるで祟り神だ。

「くそ、静香ー!」

「待って。」

「!?!」

おれがまた走りだそうとしたら、誰かに声を掛けられた。後ろを振り向くと黒い頭巾に黒い外套という、黒づくめの怪しい奴が立っていた。背丈がおれの半分くらいで子どもだということ、声から女性だとは分かるが、さつきまで近くには誰も居なかつた筈だ。

「誰だ…。」

こいつは危険だ…さつきからおれの憾が言っている。声を聞いた時から感じている威圧感が半端ない。ただ者じゃないのは確かだ。

「……もしかして最近出る妖ってお前の事か。蜘蛛だと聞いていたがまさか人型だった

とはな。」

「こんな美少女を化け物呼ばわりなんて酷いね、”王様”。」

「つつ!？」

「ふふ、驚いてるね。」

(何故その事を！)

「それはまだ秘密だよ。」

「な！」

「何で知ってるかって顔してたよ。」

こいつ、心を読めるのか!?

少女は大層おもしろそうに笑っている。だがおれにはその笑い声が呪詛にしか思えなかった。

「さて、最初の質問だけど…そうだね、ミワとでも名乗っておこうかな。」

「ミワ?」

「そう。そして二つ目はね、今話すとつまらないからだよ。もっと楽しまないと。」

「…ふざけているのか。」

「失礼だね、わたしは真面目だよ。けどやつと威厳が出てきたね。覚醒までもう少しかな。後はきつかけだね。まあ、それも時間の問題かな。」

ミワはまた楽しそうに笑っていた。その笑い声は悪戯の成功した子どものように“不自然に”無邪気だった。

「結局、おれに何の用だ？」

「おお、すっかり忘れていたよ。実はあの巫女の場所を教えてあげようと思つてね。」

「静香の場所を知つてるのか!？」

「うん、知つてるよ。今はあの大蜘蛛と一緒にこの先にいるね。」

ミワはおれの後ろを指差した。

「この先か！」

「気をつけてね、油断したらきつとすぐ死んじやうと思うから。」

「……忠告、感謝する。」

おれは指の指された方を走つた。無論、疑念はあつたが他に手がかりは無いので信じるしかなかった。

「頑張つてね王様。じゃないと、私

この国、呪つちやうから」

……しばらく行くとがさがさと音が聞こえてきた。音のした方に行くくと人の背丈を優に超える大蜘蛛と静香がいた。

「静香!!」

このままじゃやばい。

おれは駈け出そうとしたが……

「うっ!」

体が動かない。あの大蜘蛛を見た瞬間、猛烈な恐怖が襲ってきた。

(何なんだ、あの妖……)

妖を見るのは初めてではない。普通の妖とは次元の違う大妖たいようの一種、大天狗『清光坊』も見たことがある。しかしこいつ大妖とも違う。

(狂っている)

まるで大蜘蛛は〃〃崇られているように〃〃狂っていた。

妖を祟るなど聞いたことが無いがそう表現するしかないように思えた。正気を失い、力を得る。よく聞く方法だが妖がやるのと人がやるのでは次元が違うとよく分かっていた。

…あれには勝てない。軍神ならまだしも、神威もないおれではだめだ。静香を助けたいが、無理だ。二人とも死んでしまう。

「グウオオオオオ!」

蜘蛛とは思えぬ叫び声を出しながら大蜘蛛が静香の方に向かった。

「くそ！」

おれは無理やり足を動かして向かおうとした時

(信弘、助けて。)

静香が呟いたその願いが聞こえた。

(時は来た。)

気付いたら静香の前に立って大蜘蛛の進行を止めていた。

手には一本の矛。

それは武力。それは軍事力。

まさに力そのものだ。そしてその力を使うのは若き現人神であった。

## 第五話

「間に合ったか…。」

「えっ…信弘？」

「おう、助けに来たぞ。」

静香は突然のことに驚いていた。よく見てみると着ている巫女装束にはいくつもの切った痕があり、必死で逃げ続けていた事を物語っていた。普段ならこんな大蜘蛛なんて見たら気絶している筈なのに、氣力を振り絞り街に行かないように頑張っていたのだろう。

「まったく、無茶するんじゃないよ。」

グワアアアツアアアア!!

「ちっ。」

大蜘蛛が雄たけびをあげながら押してきた。蜘蛛でも雄叫びをあげるのか、と場違いな事を考えながらおれはそれを足を踏ん張りどうにか矛で防いでいた。

力を得て分かるがこの大蜘蛛、やはりただの妖では無い。正面で対峙しているだけで



心が碎けそうな位の怖さがある。だが後ろには静香がおり、ここで負けるわけにはいかない。まずは静香を安全な所に移さなければ…。

「一旦退くぞ、静香。」

おれが矛で押し返そうと矛を押した。するとおれの背丈を優に超えている筈の妖を飛ばせてしまった。恐らく矛の力であろうが、今までの自分では考えられない力だった。

「凄いな…。」

驚きながらもおれは間髪いれず、妖の足めがけて矛を振った。妖の足が細いからなのか、それともこの矛の切れ味が凄いのかは分からないが難なく足を一本切り取っていた。

ギギヤヤー!!

「行くぞー!」

大蜘蛛がもがいている（様に見える）内におれは静香の手を取って走りだした。だが静香はおぼつかない足取りをしていて、今にも倒れそうだった。

「ちよつと、我慢しろよ。」

「えっ…」

おれは矛を一旦しまい静香の肩の下と膝の下を持ち上げて（横抱き）走った。

「お、重くない?」

「全然。お前、軽いんだな。」

そう答えると何故か静香は黙りこくった。

「おいどうした、どこか痛むのか?」

「ううん。ただ安心して、ね。」

「…そうか。」

しばらく走り続けていると川の音がしたので、その方向に進むと河原に出た。おれは静香を降ろして矛を出した。大蜘蛛はまだ追いつかないようだが一応念のためだ。

「怪我は大丈夫か?」

「うん、大丈夫。それより信弘、それって…」

静香が矛を指しながら聞いてきた。

『『八千之矛やちのほこ』、神威だ。』

神器『八千之矛』、それがこの矛の名前。数多ある『大国主大神』の名の一つを具現化したもの。

「神威、使えるようになったんだ…。」

「ああ、ついさっきな。それにしても無茶しやがって。」

「分かってる…。でも玉も居たし、街に連れていく訳にもいかないでしょ。」

「それでもだ。死んだらどうすんだよ。心配させやだつて。」

「……」

「ん？」

「うう……」

静香がいきなり膝を抱いて泣いてしまった。よく見ると身体も震えていて怯えているように見える。

「お、おい、大丈夫か!？」

「ご、ごめん。さつき……までの事を、思い出したら……今になって……怖くなって……」  
……おそらく静香はおれが来るまでは無我夢中で、それこそ蜘蛛に対する恐怖すら忘れるぐらい必死だったんだろう。それが今、少しとはいえ安心したせいで逆に恐怖がやってきたんだろう。

おれは何て声を掛ければいいのか分からなかった。けれどおれは何かしないといけないと思ひ、静香の傍に行き……

「大丈夫だ。」

抱きしめていた。何故こうしたのか、おれは後になって考えてみても分からなかった。けどこの時はこうしないといけないと思った。

「え……」

「おれが守る。何がなんでも守ってやるから大丈夫だ。だから……安心しろ。」

きつとあの静香の助けてほしいという願いが影響していたんだろう。もちろん無くても助けてはいた。ただ今の状態をほっとけなかった。何とか元気づけてやりたかった。

「……おれじゃ頼りないか？」

「……うん。頼りにしています、王様。」

そう言うのと静香はおれにもたれ掛つてきた。静香の体からは震えが無くなっていて、涙も止まっていた。どうやら少しは役に立てたらしい。

「……………」

……今さらになって恥かしくなってきた。こんなに近くで触れ合うなんて子ども時代以来じゃないだろうか。今、鏡をみたらおれの顔は真っ赤になっているに違いないだろう。けど今さらどこかせないしと、そんなことを考えながらどうしようかと悩んでいると

「つつっ!？」

いきなりあの大蜘蛛の禍々しさを感じた。おれは静香を離し辺りを見渡してみるが、まだ姿は見えない。

「どうしたの、信弘？」

「…妖が近付いている。」

「えっ!？」

「まだ姿は見えないが…もうすぐ来る。」

「じゃあ、逃げないと…。」

「いや、それはだめだ。」

「なんで!？」

「もう夕方だ。暗い山はただでさえ危険なのにその上妖が迫っているとすればどうなるか分からん。」

「で、でも…。」

「それに山から出ても町には行けないしな。」

「あ…。」

そう、もう逃げるといふ選択肢は無くなっていった。逃げ切れないだろうし、第一これ以上の放置したら更に被害が広がってしまう。ならば…戦うしかない。

「まあ、安心しろ。お前の頑張りは無駄にしない。」

「でも、信弘が…。」

静香が心配するのも分かる。おれも正直言つて、怖い。

「おれは負けないさ。絶対にな。」

それでも静香を安心させようと精一杯の強がりと言った。

「……………うん。」

「さてつと…。」

おれは矛を握り直し改めて周りを見渡した。ここは河原、そばには川が流れていて心地よい音を奏でている。周りは石だらけで隠れられそうな所は無い。これなら妖が来てもすぐ目にする事が出来る。ならば来る前にやることをやっておこう。

「静香、お前に頼みがある。」

「なに？」

おれは静香の方を向いた。正直これを頼みたくはない。これから先、静香にも苦勞をかけてしまうからだ。しかし今は頼るしかない。

おれは意を決して頼んだ。

「おれの巫かんなぎになってくれ。」

巫は人と現人神の仲介を行う。神威は人々の信仰を受けることにより發揮する。しかし現人神は人であるので信仰を上手く受け取る事ができない。だから巫はその仲介をして現人神に信仰を伝える。信仰が無くなると現人神の力は弱くなってしまうので、巫は現人神と常に共にいることになる。しかしこの先、おれの巫は確実に大変だ。何せ王の巫女だからな。本来なら静香を巻き込みたくないが、あの妖を今のおれで

倒せるとは思えない。だから静香に頼るしかなかった。

「分かったわ。」

そして静香ならきつと受けてくれると分かっていた。昔から本当に大変な時はいつも助けてくれていたから。

「すまない。…いや、ありがとう。助かる。」

「信弘はこれから国を守るんでしょ。なら私も少しぐらい手助けしないとね。」

「静香が手助けしてくれるなら怖い物なしだな。」

おれ達は二人顔を合わして笑っていた。二人なら何とかなる。そんな気がしていた。

「じゃあ、始めるか。」

「うん。」

おれ達は儀式を始めた。儀式と言っても別に踊ったりするわけではない。手を繋いで静香におれの分霊を送るのだ。

分霊とは神の分身。それを移すことにより少しだけ神に近づく事が出来き、分霊を通して信仰を現人神に伝える。それが巫の役目。

おれは手を静香に出した。静香がそれを両手で包みこんだ瞬間、周りの音が遠くなくていくように感じた。

(これが神域……)

神域、神の領域になつてゐる。おれは改めて理解した。自分が現人神になつたと言う事を。おれは自分の内側に意識を向けた。自分の中にある靈魂を見つけ、その分靈を作る。元來この作業はあまりにも危険である。自分の魂の分身を作り相手に送るのだから。なので本来は十分な準備と監視の下で行う。しかし今はそのような余裕も、暇もない。

(ん?)

分靈を作るなど初めてだ。しかしその初めての作業は滞りなく行われてしまつた。まるで誰かがやつてくれてたかのように……。

若干の疑問……どころか不安も残るが時間が無い。おれは疑念を振り払い静香を見る。

「良いか、静香。」

「うん、いつでも。」

静香も雰囲気が変わつていた。その姿は凛々しく、正しく神に仕える巫そのままだつた。

目を瞑り分靈を送る。手を伝わり、静香に向かう。伝わるまではまるで永遠に、されど一瞬にさえ感じた。

「終わったよ。」

時が無くなつたかの様な感覚がいつまでも続くかと思つたが、静香の声により、目を



開け静香を見る。

「……調子はどうか？」

「問題無いよ。むしろ傷が癒えた感じさえするわね。」

「そうか……。ふう、失敗しなくて良かった。」

「ところでさ……」

「ん、どうした？」

静香は何か戸惑っているように見えた。

「その、信弘なの？」

静香の問いにおれは一瞬、何の事かと思ったが

「……ああ、そういうことか。」

その意味はすぐに分かった。

「違うかと聞かれればそうだし、同じと言えばそうなんだろうな。」

「……どういう意味？」

「初めて大神に会った時に教えてもらったんだが、今のおれはおれに生まれ変わった様なものらしい。」

「ん？」

静香は訳が分からなそうに唸ってた。まあ、分からなくて当然だな。

「現人神になるとは神になる事だからな。人じゃいけないらしいんだ。」

「人じゃいけない？」

「そう。まあ、詳しい事はおれも分からん。大神もそんなに詳しく話してくださいさらなかったしな。おれが知っているのはこの生まれ変わりをして現人神になるという事ぐらいだ。」

「初めて知った…」

「普通は知らないさ。」

「えくと、つまり…」

静香は少し考えを整理して

「信弘じゃ無くなつたていう事？」

最初と同じ結論になつたらしい。

「そうだと思う。」

「……敬語とか使つた方がいい？」

……なん…だと

「いや、やめてくれ。頼むから。」

おれは一瞬の間も開けずに断つた。これおれの口か、というぐらい素早かつた。

「え、でも。」

「お前がおれに敬語を使うなんて……違和感ありすぎてなんかやだ……」

「なんかやだつて……」

「それにな……」

「……それに？」

「これから、おれと周りの人の関係はがらりと変わるだろうからな。多分、森山家の方々の関係も今まで通りとはいかないだろう。」

仕方のないこととはいえやはり辛い。ある意味、一人になるかもしれないのだから。

「……………」

「だからせめて静香、お前ぐらいにはこれまで通りでいてほしくてな。」

「それは命令？」

「いや、おれ自身からの頼み。おれの我がままだ。」

おれは静香をそう言い切った。このずっといた幼馴染位には変わって欲しくないという願いを伝えるために。

「じゃあ、しょうがないわね。今まで通りでいてあげるわ。」

「そうか。……良かった。」

これで心配事は無くなった。あとは生き残るだけか。

妖の気配はもうすぐそこまで来ていた。物凄い轟音を撒き散らしているから嫌でも

分かってしまう。ふと、静香の方を見るとまた身体が震えていた。

「大丈夫か？」

「……大丈夫。神様がすぐそばにいるから。」

「そうか。じゃあ、期待に応えるとしますか。」

おれは妖が来るであろう方向に矛を向けた。妖は相変わらずの禍々しさをだしながら、こちらに突進してくる。

「静香、下がってろ！」

おれが静香にそう言った直後、森の木をなぎ倒しながら妖が突っ込んできた。

「くっ！」

おれはとっさに矛を横にし防いだが、勢いは殺しきれずそのまま後ろに飛ばされてしまった。

「ガアアアアアア！」

なんとか立ちあがったが、その直後更に妖が突進してきた。

「くっそー！」

おれは無理やり身体を動かし横の川の中に飛んだ。ふと静香が気になり確認してみると、多少離れた所で見守っていた。幸い妖は足を切られた恨みか、おれしか狙っていないようだ。

「さて、次はこつちから行かしてもらおうか！」

おれは妖に向かって走り切りかかったが

「何…!?!」

妖はあろうことか跳んで避けた。おれの背丈を優に超える跳躍で距離を取った。

「おいおい…。」

無論普通の蜘蛛は跳んで避けたりしない。例え妖といえど限度があると思うのだが…。

「危ないー！」

おれが呆気にとられると、静香の叫び声が聞こえてきた。何か嫌な予感がして横に転がった。その直後、後ろの方から轟音があった。……ふと見るとそこにあつた岩が砕けていた。何が起きたのか妖の方を見ると…糸が飛んできた。それもただの糸ではなく纏まつて槍の様になっている。

「痛っ!」

何とか身体を捻ったがかわしきれず左腕を磨っていった。まだ問題無いがまともに当たっていたら後ろの岩みたいになつていたかもしれない。

「何なんだ、いつ?」

普通の大蜘蛛なら絶対にあり得ないことばかりしてくる。跳躍はまだしも、糸を纏め

て吐き出してくるなんて聞いたことも無い。この禍々しきといい、本当に祟り神じゃないだろうか。

「考えても仕方ないか。まずは一太刀浴びさせないと。」

おれはできる限り体勢を低くして当たらないように走ったが、糸の塊が自分の横すれすれで通っていくたびに冷や冷やしてしまふ。どうやらあの糸は連射は出来ず、射程は真正面みたいなのでおれは妖の側面に出る様に廻り込んだ。そして妖の近くまで行き、切りつけた。

ギヤヤツヤアアアアアアアアアア!!

矛が妖の身体を切り裂き、妖が叫び声をあげた。どうやら効いているみたいだ。おれは更に切りつけようとしたが

「うおっ!」

妖がいきなり突っ込んできた。矛を盾にするが防ぎきれはすもなく、倒れこんでしまった。妖はそのままおれに覆いかぶさってきた。

「やっば!」

このままではやばい。しかし身体を動かそうにも妖に押さえつけられていて動けそうに無かった。

「……………」

………  
妖と目が合う。妖の眼は普通の蜘蛛同様8個あったがそのどれもが不気味に赤く輝いており、思わず目を逸らしたくなる、そんな眼だった。

「くっ！」

妖が顎を開きおれの顔位はあろう牙を出してきた。どうやらこのまま食べるつもりらしい。そんなのはごめんのだが、矛を持っている手は押さえつけられていて防ぎようがない。何とかしようともがいていると、

………

妖の注意が別の所を向いていた。何事かと見ると……

「静香！」

離れていたはずの静香が妖に立ち向かった。手に石を持っているからきつと投げていたんだろう。

「ばか、逃げろ！」

「………」

静香は妖に睨まれた恐怖からかおれの声も届かず、完全に固まっていた。その間にも妖は静香の方に向かっていく。もしあの糸の塊を吐かれたら終わりだ。

「くそっ！」

おれはそれを止めようと立ち上がるが間に合いそうに無い。

(どうすればいい、どうしたら助けられる！)

(集めるのだ)

「えっ？」

どこからともなく声が聞こえてきた。それも聞いた事のある声が：

(その『八千之矛』は数多の武だ。ならば集めよ、武を)

おれは迷うことなくその言葉に従った。武力を矛に集める。ほんの少し、そうしただけで矛の力が凄まじいと事になっているのが分かる。

「まにってくれ!!」

おれは矛を振りかぶった。妖は刻一刻と静香に近付いており、今向かっても追いつきそうにない。ならばどうするか。簡単だ、投げればいい。

「これでも、くらいやがれ！」

おれは力の全てを使い、妖に向かって矛を投げた。

ギィアアアアアアアアアアア!!!

矛は妖の身体を貫き、穴を開けていた。

「…やったか？」

妖の身体は崩れ落ち、動かなくなった。おれが急いで静香の方を見ると…無事だっ



た。おれは安堵し、そのまま倒れた。

——  
???

「あくあ、やられちゃった。」

一人の現人神と妖の戦いを少し離れていた木の上で一人の少女、ミワが見ていた。

「まあ、これぐらいで死なれても困るけどね。」

ミワは嬉しかった。まだまだ楽しめると分かったから。

「さくて、次はどうしようかな。」

まるで次の遊びを決めるかのような口調で次の事を考えていた。

そう、ミワにとっては遊びだった。楽しませてほしかったのだ。

「じゃあね、王様。まだ、死なないでね。」

そういつてミワはまるで夕陽の赤い光に溶け込むように姿を消した。